

環を生み出しています。この間もあなたに倣^{なま}って教誨を受けたいという者が来たでしょう。あなたの生き方は、すでに多くの人を救っているのかもしれないし、そういう人たちからあなたも良い影響を受けているかもしれない。人間はひとりでは生きてはいけません。〈自利〉だけではいけませんよ」

そう振ると山本は黙って笑い、それ以上、反論しなかった。

前年の暮れには、こんなこともあった。山本が、拘置所の中庭に噴水を作らせてほしいと言いだした。元配管工の腕を生かして数週間がかりで完成させた設計図には、大小様々なしぶきをあげる噴水が、どの独房からも楽しめるよう配置されていた。教誨面接にも屋外での運動にも参加せず独房に引きこもっている死刑囚の心を、せめて慰める方法はないものかと考えた末に思いついた計画だという。しかも、使う水は循環式に設計されていて無駄にはならないとある。

設計図があまりによく出来ているので、渡邊も「もしや実現するかも」と思い、教育課の職員に渡しておいた。職員もその場では興味深そうに見ていたが、その後、何の音沙汰もなかった。「駄目だった」と言葉にするのが憚^{はば}られ、渡邊が山本と噴水の計画について話することは二度となかったが、渡邊には、他人を思いやる彼の気持ちは尊いものと思えた。

「悪人正機」を地で行くような山本の姿は、新米の教誨師にとっては理想的に映った。そんな山本の人生に自分もかかわることが出来ている、きっかけを与えたのは自分が渡した『歎異抄』だ。そう思うとどこか誇らしい気持ちがあった。渡邊にとっては、山本に日々差し入れる本代だけ

でもかなりの額にのぼったが、ちつとも苦には思わなかった。

この日も、新しい仏典と武者小路実篤の『キリスト』を差し入れる約束をして、充実した思いで面接を終えた。

二 共産党嫌い

次に教誨室に入ってきたのは、四舎二階の住人の中でも大ベテラン。「三鷹事件」の竹内景助(四五歳)といえ、ここでその名を知らぬ者はいない。

竹内はいつもの気難しそうな表情を隠そうとせず、椅子に腰かけるやいなや付き添ってきた看守を「早く行け」といわんばかりの形相で睨^{にら}みつけ、無言の迫力で追い出した。「政治犯」扱いのため何かにつけ監視の目が厳しいらしく、彼の首憲嫌いは有名だ。

「私だけ特別扱いして、常にチョロチョロついて回るんですわ。他の人にはそうでもないのに、本当に気に障ります」

そう言って不機嫌そうにガタガタ大きな音を立てて座り直した後、竹内は必要以上に背筋をピンと伸ばし、わざと明るい声で切り出した。

「先生よ、この間の〈報恩講〉は良かったですなあ、いやあ、良かった。思いっきり腹の底から声を出して歌いました。あの女子生徒たちの歌声は、本当に良かった」

竹内が言うのは、一月に開いた「集合教誨」のことだ。この頃の東京拘置所では月に一度、平

素は個人個人で教誨を受けている死刑囚が一堂に集まって、みなで経を読んだり法話を聞くことが許されていた。また「報恩講」とは、浄土真宗の門徒にとつて一年で一番大切な行事で、親鸞聖人の命日の法要を営むことだ。渡邊の本派浄土真宗本願寺派（西本願寺）では一月一六日がそれにあたる。

渡邊が教誨を担当するようになってから、集合教誨も色々と趣向を凝らしていた。なるべく花祭や彼岸、報恩講などの仏事にあわせて開催日を設定し、自費で菓子を配ったりもした。その日が参加者の誰かが殺めた被害者の命日にあたれば、ともに読経もする。死刑囚どうし、独房の壁越しではなく顔をあわせて会話が出来る貴重な場でもあり、個人教誨は休みがちな者でも集合教誨にはだいたい顔を出した。

竹内が喜んだ一月の集合教誨は一六日に開かれていた。確かにこの日は特別なイベントを用意した。渡邊の依頼で駆けつけてくれたのは、武蔵野女学院の聖歌隊八人。テープレコーダーのオルガンの伴奏にあわせて「真宗宗歌」や「みほとけは」を歌ってくれた。女性には縁のない死刑囚たちを刺激しないよう、女学生たちはカーテンの後ろに立つてもらって声だけの出演ではあったが、死を待つ独房暮らしの男たちは女学生の透き通った歌声にすっかり慰められたようだった。そういえば竹内も、いつもの強面をすっかり緩ませていた。後から考えると竹内は、女学生の姿に長女の成長を重ねていたのかもしれない、と渡邊は思った。

竹内の犯行とされた「三鷹事件」は、日本がまだ連合国の占領下にあった昭和二四年（一九四

九）、国鉄三鷹駅で起きた。

七両編成の無人電車が暴走して脱線・転覆し、線路脇で六名が電車の下敷きとなって死亡、負傷者も二〇名にのぼる大惨事だった。事件の背景について語るには少し長くはなるが、その後の竹内の抱える事情を考えると省くことも難しい。

当時の世相は、内戦が続く中国で共産党の勝利が濃厚となり、朝鮮半島では共産政権と親米政権が緊張を高めていた。日本でも共産党が議席を増やしており、GHQ（連合国軍最高司令官総司令部）は反共の姿勢を明確に打ち出していた。共産党員が幅をきかせていた国鉄の大量人員整理が進められる、そんな最中に三鷹事件は起きた。事件は、「人員整理に反対する国鉄労組の犯行」という筋書きで捜査が進められ、共産党員九名と非共産党員の竹内が逮捕された。竹内は、国鉄を解雇されたばかりで共産党シンパだったことから嫌疑がかけられた。

裁判では、共産党員がそろって無実を主張する中で、竹内だけが、奇妙な行動をとった。「無実、単独犯、複数犯」と供述をくるくる変転させたのだ。そして最終的に一番は共産党員を嫌疑不十分で全員無罪にし、竹内だけを無期懲役、二審では死刑とした。後の上級審では、電車をひたりに暴走させる「単独犯行説」には技術的に相当な無理があることも分かっていた。しかし、それこそ単独犯という筋書きで走り始めた司法の電車は、決して行き先を変えようとしなかった。最高裁判所大法廷は「八対七」という僅差で竹内の死刑判決を確定させた。まるで学級委員長を選ぶような、一票を争う死刑判決は日本の司法の歴史で後にも先にも例がない。

結局、竹内ひとりが罪をかぶることになったのは、彼の再審請求補充書によると「共産党系の

弁護士から、罪を認めても大した刑にはならない、必ず近い内に人民政府が樹立される、ひとりで罪を認めて他の共産黨員を助ければ、あなたは英雄になると説得された」からだという。再審請求では竹内のアリバイを立証する複数の証言も提出されたが、裁判所は全く動こうとしなかった。この国の再審の門は、開かずの扉なのである。

渡邊よりも一〇年前に竹内と面会していた精神科医の加賀乙彦は、著書『死刑囚の記録』（中公新書・昭和五五年）の中で竹内が語った言葉を次のように紹介している。

「おれは弱い人間なんです。弱いから人をすぐ信用してしまふ。党だつて労組だつて、大勢でお前を全面的に信用するといわれれば、すっかり嬉しくなつて信用してしまつた。（略）けつきよく、党によつて死刑にされたようなもんです。（略）しかし、考えてみればだまされた自分も悪い、その点ではもうジタバタはしないつもりです」

三鷹事件は二〇一一年になつて遺族による再審請求がなされていることを付け加えて、話を渡邊の回想に戻すことにする。

この頃、死刑判決が確定してから死刑が執行されるまでの時間は、おおむね三年から五年。しかし竹内は、確定から一〇年以上獄中に置かれていた。歴代の法務大臣は、彼の死刑執行命令書にだけは決してサインしようとしなかつた。明らかな特別待遇の背景には、法曹関係者の間で「占領下という特殊な世情の下での事件であり、真相は闇の中」という共通認識があるからと噂された。

東京拘置所でこれだけ長く勾留されたのは、この当時、竹内ともうひとり、やはり冤罪濃厚と噂されていた帝銀事件の平沢貞通（昭和六二年に獄中で病死）だけである。執行されることのない死刑囚が獄中にいるというのも奇妙な話だが、人目に晒されることのない塀の中で起きることの多くは、行政の側の「都合」により動くのが常のようである。

その竹内は渡邊よりも一〇歳年上で、面接での会話の主導権はいつも彼が握つた。「ところで先生よ、この前、茶を飲みすぎてゲゲエ言つておつたから、今日はみかんと羊羹を持ってきましたぜ」

竹内は面接が続く渡邊を氣遣つて、自分のために差し入れられた貴重な食料をちよくちよく持参した。規則では死刑囚から物品を受け取つてはいけない決まりだが、この時はかりはさすがに刑務官も目をつぶっていた。

竹内もまた脱獄犯の山本に劣らず、浄土真宗の教えに真摯に向き合つた。やはり経典はしっかりと読み込んでいたし、長い独房生活での鍛錬の成果か、特に写経がうまかつた。氣に入つた『論語』の一節や諺を書き写しては、「先生、私の遺品と思つて預かつて下さい」と何十枚も渡された。竹内の独特な筆遣いは、僧侶である渡邊から見てもかなりの腕前で、芸術作品の域にあるようにすら思えた。

また竹内は写経ともうひとつ、心を鎮める術を得ていた。ヨガの行である。子どもが差し入れてくれたインドの書物からヨガの理論と実践を自分なりに研究し、教誨室でもたびたび床に座り込んで実演してみせた。

「先生も落ち着くからこれをやったらよら」

そう言いながら、どうやったら足がそんなところへ届くのか、関節はどこにあるのかというような奇怪なポーズを平気でやつてのける。その身体の柔らかさと集中力には驚かされたが、渡邊にそんな曲芸は真似できるはずもなく、もっぱら苦笑いで見学役に徹した。

死刑囚は、希望すると独房で請願作業（紙袋作りなどの手仕事）を行うことが出来る。竹内はそこで得られた報酬を渡邊にそっくり預けていて、預かった金を合算するとかなりの額になっていた。家族思いの竹内には妻と五人の子どもがいて、妻はちよくちよく面会にやってくるのだが、いつ頃からか現金を渡す（宅下げする）のだけは止めていた。理由は、妻に付き添ってくる共産党員の事務局長の存在だという。せっかく家族に金を渡しても、共産党に支援費用などの名目で横取りされ、いのように使われてしまうのではないかと竹内はひどく疑っていた。

面接では気のいい竹内も、ひとたび独房を出ると人が変わったように問題を起こした。

読書好きで知識欲旺盛、ひと一倍、頭の回転が速く、強盗や強姦殺人を犯した他の住人たちを見下すような態度を隠そうともしない。行く先々で反目の火花を散らして煙たがられ、売られた喧嘩を律儀に買っては諍い（いさか）を起こし、度々、懲罰房に入れられた。そのため渡邊まで、他の死刑囚の面接の時に、竹内についての苦情をぶつけられることも少なくなかった。また、刑務官にも然り。竹内は、彼らが日々の業務でちよつとしたことを間違えて謝らずにいると、太い眉をつり上げて食ってかかった。そんな竹内と対等に会話ができるのは、先の山本くらいである。

この日より少し前の面接で、渡邊が新聞のコラムで見つけた「忘れ勝ち」という言葉を竹内に紹介した時のことが「教誨日誌」に書かれていた。

「竹内さん、嫌なことは忘れた方がよいですよ、『忘れ勝ち』とは、溜めると病気になるよということではないですかね。後ろ向きの気持ちは常に排泄（はいせつ）してゆかないといけません。これは竹内さんのためにあるような言葉ですよ」

そう言う竹内は何も答えなかった。本当に一本気な男で、身の回りの小さな不正義のひとつひとつがどうしても許せないでいた。

この頃の竹内は、すっかり事件や裁判のことについては諦めた様子だったが、時おり意味深な発言をしていたと「教誨日誌」にはある。

昭和四〇年五月二十九日（土曜日）

裁判をふり返り、「私は長年、人の鼻で息をしていた。自分の鼻で呼吸することを忘れていた」と言う。

九月二七日（月曜日）

先日の彼岸法要で聞いた「蜘蛛の糸」の法話は、まるで自分のことを言われているようでカチンときたという。そのため、説教は聴く時の個人の状態によってどのようにでも聴けるものだと説明した。

昭和四一年一月二日(土曜日)
「今さら、私の馬鹿さが知られます。同僚は共産党の本部課長や、第一生命の年収五百万円の重役になっている」と言う。

竹内は事件について考える時、仏教でいう「因果」という言葉をよく使った。今、起きている事々は先祖の行いが関係しているのではない、自分の自由意志により決まる「独因独果」なのだから黙って受け止めなくては仕方がないと重ねて言い張った。

「先生よ、私はこの黒潮の上にヤケで乗っているのではないんです。明らかに自分の自由意志で見届けた上で乗るのであるから、どんなことになろうとも、後悔などないのですよ」

黒潮とは、死刑執行への道ということだ。今さらどうあがいても裁判の結果は変えようがない。ひとり死刑という貧乏クジを引いたのは他人のせいではなく、自分が悩み考え、最終的に自分の意志で導いた結果なのだ、竹内は自分自身を納得させようとしているように見えた。

この日、話の向きはどうしても明るくない方向へと進みがちだった。竹内は「独因独果」の話を一ひとしきり勢いよく話し終えると、今度はガツクリと肩を落としてひとり語りのように続ける。

「まあね、先生よ、そうは言いながら、私も正直言うと、こんなに信心してどうなると思うことはありませんよ。自分は所詮、死刑囚じゃないかと、時々、自暴自棄になりますわ……」

自ら選んだ人生と自分に言い聞かせながらも、色々と考え煮詰まることもあるのだろう。竹内に限らず、教誨を受けている死刑囚が信心することへの疑問を抱くのは珍しいことではなかった。熱心に教誨に臨んでいる者ほど、ある時期がくると同じ壁にぶつかかった。

三〇代も半ばの渡邊にはまだ、人生であらゆる辛酸を舐めてきた彼らの苦しみに向き合うだけの人生経験もなければ度量もなかった。大ベテランの師匠、篠田龍雄のように、とてもいかに。疑問をぶつけられた時は、自分が学んできた真宗の教えを総動員して必死に答えを捻りだそうとした。そして、よく「辺地」という言葉を使った。「辺地」とは、浄土のほりという意味だ。阿弥陀仏に救われていく世界が「浄土」であるならば、阿弥陀仏の心を理解できず苦しむ世界が「辺地」である。竹内の気持ちは何とか慰めようと、渡邊はこう伝えた。

「竹内さん、あなたは今、〈辺地〉におられるのです。偉そうなことを言っている私だって一緒です。どこかで疑う心がぬぐえないでいます。でも阿弥陀様は、信じることの出来ない今のあなたの、そのまんまの姿を受け止めて下さる。あなたが地獄へ落ちていくなら、落ちていくそのまんまの姿を抱き留めて下さる。悪人と同じ、信じる事が出来ない者こそ救われていくべきなのです。どんなに疑っても、ちっとも功德を積みなくても、阿弥陀様は浄土へ行ける条件など一言も仰っていない。だから疑う心があって当然、安心していいんです」

このフレーズは、竹内と同じように不信心な自分を嘆く者たちへの渡邊の十八番になっていた。

裏事情をあかさすようだが、実は、竹内と渡邊が交わしたのと同じ「辺地」を思わずやりとり

が、『歎異抄』に出てくる。渡邊がとりわけ好んで読んでいた部分だ。渡邊の解説によると『歎異抄』を書いたと伝えられる弟子の唯円は、親鸞聖人にこう尋ねている。

「実は私は、阿弥陀様の御本願の話を聞いても、ちっとも嬉しくありません。念仏を唱えても、ちっとも嬉しくございません。浄土に往生したいとも思いません。これは一体どういうことでしょうか」

すると親鸞聖人は答える。

「はあ、あんたもか。私もだよ」

びっくりして親鸞を見つめる唯円に、親鸞は続ける。

「私もそうなんだよ。そういう心を持った人間こそ、阿弥陀様は救おうとなさって下さるんだよ。御念仏を有り難がったり、御本願を有り難がったりすることが救いの条件ではないんだよ。ただ、阿弥陀様にお任せすればそれでよいのです」

渡邊が親鸞そっくりそのままの解説をしてみせると、竹内はじっと聞いていた。

「そうでしたね、先生。こうやって苦しんでいるのも私自身の姿として受け止めなくてはならないでしたね。でもね、何年学んでも、なかなか実際にやるのは難しいもんです。こうやって苦しんでいるのも私だけでもないでしょう。今、娘のことを思い出しました。私がこんなことになって、娘の将来が心配ですよ……」

今日という日は、竹内の苦しみは尽きぬようだった。面接の最初こそ一月の集合教誨の思い出話をにぎやかに語りあったが、その後は、吐く息も吸う息も苦しいような会話ばかり。やがて訪れる長い沈黙は、話題の終点でもあった。面接は予定の三〇分をすっかり過ぎていた。かける言葉も見つからず、頭の中で何とか一言でも捻り出そうと立ち往生している渡邊の気配に気づいたのか、竹内は気まずい沈黙を破るように席を立った。そして帰り際にこちらを振り返り、思い出したように言った。

「そうそう、先生よ、私の近くの房に木内何某（なにかし）という新入りが来ました。二〇代の若者で、そろそろ上告だそうですね。教誨を受けたいと言っておりまして、今は山本君が面倒をみております。今日の午後あたり来るかもしれません。真面目なやつだから、ひとつ宜しく願いますよ」

竹内にも心を許す相手がいるのだと知って、渡邊は少しホッとした。

塀の外に普通に暮らしている人たちにとって「死」はいつも遠い話だ。年老いていよいよ病に倒れ、先に不安を感じる事態にでも迫られない限り、周りには見渡す限りの「生」であり、今の穏やかな日常が永遠に続くものと思ひ込んでいる。

しかし死刑囚は、今、この瞬間は確かに「生きています」が、明日には「死んでいる」かもしれない者たちである。日常の思考の大半が「死」で占められている彼らの進む方向は、大きくふたつの道に分かれる。ひとつは、考えることを止めてしまうこと。すべての苦悩を忘れ、諦め、目の前で起きることのみを見つめて日々を淡々と生きる道である。

それでもうひとつは、「残された時間を生きる意味」を見出そうともがく道。もとより苦渋に満ちた己の生き様に、苦しみは深まる。竹内のように信心への疑念も生まれる。だが深まる苦し

みと比例するように、残された時間がより密度を増していくことも間違いない。同じ風景も眺める場所が変われば趣を変えるように、今ある「生」もまた、「死」の側から眺めれば異なる輝きを放つこともある。

渡邊はこの頃、死刑囚たちの間で「教誨を受けると人間が暗くなるから、受けない方がいい」という会話が度々、交わされているという話を聞いたことがあった。それは、あながち見当外れでもないなと思った。物事の原因を他人のせいにならず、自分の方向に向けて突き詰めて考えることのしんどさを的確に言い表している。自利だの利他だのと信心を深め、何かを見出したからといって罪が消えるわけでもなければ、「死」への時間が猶予されるわけでもない。時には「こんなことして何になる」と落ち込むこともあるだろう。

しかし、考えぬことの気軽さが心の平穩に繋がるかどうかは、また別の問題だ。苦しみや悲しみを頭の中から追い払い、口に出さないでいても、胸の中ではどんどん増殖し、澱み、充満していく。それは、人間が生きていることの証でもある。たとえ堂々巡りでも、何度でも考え、そして残された時間にすべきことを語り合うことの意味はきつとある、渡邊はそう思って自分を奮い立たせるのだった。

三二 悪女

裁判所で死刑判決が下される度に、四舎二階には次々と新入りがやってくる。

この数年間で一番、注目を浴びたのは、久しぶりの女性死刑囚となった小林カウだろう。カウの事件は連日、沢山の脚色を交えて新聞や週刊誌を賑わせていた。すさまじい物欲と色仕掛けで男を次々と手にかける稀代の悪女。金のためなら男の命を奪うことすら躊躇ためらわない冷酷な女。四舎二階でその顔を見たものはまだおらず、「かなりの美女らしい」という噂がまことしやかに流れた。

しかし噂というものは、人の口を経るごとに尾ひれ背びれが付いてゆき、しまいに足まで出来てひとり歩きを始めてしまうものだ。カウが逮捕された時の年齢は五三歳、齒も数本抜け落ちて、白髪交じりのザンバラ頭。老いてもなおお目を見張るような色白の肌が女の七難を隠した可能性は否定できないが、「かなりの美女」はさすがに男たちの妄想の産物であった。

淫靡いんぴな噂に包まれた女死刑囚の登場に、万が一、日照り続きの男たちを興奮させるようなことがあってはならぬと気をまわしたのは拘留所の官吏たちだった。カウの身柄は、四舎二階から遠く離れた女性専用の別の棟に置き、後に始まる教誨面接も、教誨師に彼女の独房までわざわざ足を運ばせるほど念を入れた。そういう事情で、後々までもカウの容貌が四舎二階の男たちに披露されることはなく、「かなりの美女らしい」という噂は艶を放ち続けた。

渡邊は後にカウの面接を担当し、狭い独房でその顔にまじまじと向き合うことになるのだが、「余計な配慮など、まったく必要ないのに」と思わず苦笑いを噛み殺すことになる。当のカウにしてみれば、いずれも余計なお世話なのだが。

東京の冬は、広島と比べて日が傾くのが随分と早い。時計の針はまだ午後四時前というのに、外はもう暗くなり始めていた。渡邊は、篠田への簡単な挨拶文を認めてテープルの隅に置き、帰り支度をした。右手にはいつものテープレコーダーを、左手には靴下を渡し終えて空になった段ボールを提げて、教誨室の薄っぺらいドアを腰で閉めた。

拘置所の廊下から駐車場に出ると、コンクリートの塀の上から水銀灯が妖しげに辺りを照らしていた。薄暮も間もなく闇夜に紛れてしまうだろう。四舎二階にずらりと並ぶ独房の窓からは、小さく淋しげな明かりがポツポツと漏れていた。渡邊には、そのひとつひとつが、彼らの残された命の灯のように思えた。

第五章 娑婆の縁つきて

一 竹内景助の最期

竹内景助が亡くなったのは、昭和四二年（一九六七）が明けて一八日目のことだった。

渡邊普相の「教誨日誌」によると、体調不良という理由でしばらく教誨を欠席していた竹内が面接に出てきたのは、亡くなる九日前の一月九日（月曜日）とある。

刑務官に抱きかかえられるようにして教誨室に入ってきた竹内は、もう言葉を発することも出来なくなっていた。机に突っ伏すようにして座るだけで精一杯、意識がどれだけはつきりしているのかも分からない。渡邊は、会話するのは諦めた。「ともに歌いましょうか」と一方的に話しかけ、竹内が好んだ「みほとけは」をテープレコーダーで流した。しかし、その口から歌詞は聞こえなかった。

それでもオルガンの調べが流れると、竹内の表情が幾分か和らいだように見えたので、同じ曲を三度、繰り返して流した。広島で被爆した話の続きは、もちろん出来なかった。この日が、日誌に記された竹内景助、最後の面接となった。

竹内はこの数日後に昏睡状態となり、同月一日に息をひきとった。四五歳だった。後に伝え聞いたところによると死因は定かではないが、脳腫瘍だったらしい。

振り返れば、竹内は逮捕から一八年もの歳月を独房に置かれた。竹内の死は、再審請求にうんともすんとも言わなかった裁判所がようやく「本人から意見を聞く」と連絡を入れてきた矢先のことだったともいう。竹内が病死した報せに胸を撫でおろした関係者は少なくなかったのではないかと、そう考えると渡邊はどこか道り切れない思いにさせられた。

主のいなくなった二畳半の独房には沢山の写経と、論語を書き写した書が几帳面に整理して積まれてあった。数が数だけにそのままにしておけば焼却処分されてしまう恐れもある。とりあえず渡邊が整理して引き取ることにした。共産党に横取りされないようにと竹内が警戒していた貯金も、預かったままだった。獄中で許される請願作業のわずかな賃金に加え、雑誌に寄稿したり本も出版していた竹内は、当時の金で一〇万円近くは貯めていたと記憶している。死刑囚からは色んなものを預かったが、教誨師の渡邊に金まで預けたのは竹内だけだ。

竹内の死後、拘留所を通じて遺族である妻に連絡を入れてもらった。

共産党員が本当に竹内の貯金をとってしまうのか、渡邊には分からなかった。しかし長きにわたった裁判で、共産党やその系統にある弁護士との間に起きたトラブルについて竹内から直に話を聞かされた身としては、竹内がそう警戒したのも仕方はなかりうと感じていた。だから竹内の貯金は、出来れば妻ひとりに渡したかった。

しばらくして、妻から電話があった。妻によると竹内の遺品の日記にも、貯金は渡邊に預けているという記述があったらしい。妻も都内に住んでいるというので、ついでの折に立ち寄ることを約束した。

後日、自宅を訪ねると、妻は男性と二人で待っていた。男は、竹内の裁判を支援した事務局長という肩書であると紹介された。

「事務局長さん、あなたは、この金をどう使われるおつもりか？」

いささか出過ぎた真似かとも思ったが、渡邊は確認しないではおれなかった。

「竹内君は無実でしたから、彼の冤罪をうったえていくための活動に使います」

渡邊は一言、添えた。

「この金は、竹内さんが奥さんに残したものでしょうから、なるべく奥さんの生活のために使ってもらって下さい」

そういうと妻は無言で頭を下げた。

それから何日かして、竹内が残した「書」を、事務局長がわざわざ三田の寺まで取りに来た。こんな沢山の書を一体どうするつもりかと尋ねると、竹内を知る人たちに売って換金し、今後の活動資金に充てるという。

「換金」という乾いた響きに、渡邊にはどこか割り切れないものが残った。そのまま書を渡す気にはなれず、寺の本堂の床いっぱいに竹内の書をずらりと並べた。そして事務局長に向けて、幾つかの書を指さして意味が分かるか聞いてみた。案の定、事務局長には意味が分かるどころか、

字の読み方すら分からなかった。

「自分は共産主義者なので、宗教のことは分かりませんから」

事務局長は不愉快そうに弁明した。

渡邊からすれば、竹内が孤独な獄中で、その不遇な人生に絶望することなく必死に学び、そして心を込めて綴った書である。このまま意味も理解されぬまま引き渡し、「有名死刑囚の書」などというふれこみで売られ換金されるのをただ見るのはしのびなかった。竹内のために、せめてこのくらいはしてやらねばと、事務局長を前にひとつひとつの書を大きな声で読み上げた。そして、そこに込められた意味を『歎異抄』や『論語』を引きながら丁寧に解説していった。

事務局長はさほど関心もなさそうだったが、これも引き渡しのための儀式と観念したようで、気のない相槌を打ちながら聞いていた。

一通り渡邊の説明が終わると、彼ははいそいそと本堂の端から書を片付け始めた。その乱雑さが、またも気に障った。渡邊にはまだやりたりない、思いが残っていた。

「事務局長さん、あなた、人が死んだらどうなると思いますか？」

事務局長は片付けの手を止め、はあつという驚きの視線をこちらに戻した。

「ええっ？ 人が死んだら？ 竹内君は……霊魂になって、私らのことを見守ってくれているんじゃないですか」

「あなた、本当の共産主義者じゃないね」

「はあ？」

「人間、死んだら終わり、ゴミになるというのが唯物論者でしょう。あなた、本物の共産主義者でも唯物論者でもないね。あなたと話をしておると、わし、そう思うよ……。竹内さんのこの書は、全部あなたにやるわけにはいかん。彼の遺品として私の手元にも幾つか残させてもらいますぜ」

そう言って渡邊は、竹内が自分のためにと書いてくれた数枚を抜き取った。

事務局長は、たった二度しか会っていない僧侶の棘々しい言葉に戸惑い、事情をよく飲み込めない様子だった。歯切れの悪い説明をグジャグジャ言いながら、かき集めた書を抱えて本堂から出て行った。事務局長の後ろ姿は足早に階段を駆け上り、あつという間に日向坂の向こうに消えた。もし事務局長が善意の人であったなら気の毒な話で、渡邊の言動は見当違いだったということになる。しかし、もはや確かめようもない。

ひとり残された本堂で、渡邊は阿弥陀様をじっと見上げた。「金の切れ目が縁の切れ目」という言葉が頭に浮かんできた。

「これで、竹内君との縁も切れたなあ」

太い眉毛を下げ美味そうに羊羹を頬張る竹内の顔が、阿弥陀様の穏やかな笑顔と重なった。

二 山本勝美の最期

昭和四二年（一九六七）の日めくり暦も残り一センチほどになった一〇月三日（月曜日）、夕